

光の子



No.220 2025.12.20

●年間聖句 すべてを吟味し、良いものを大切にしろ。(テサロニケ信徒への手紙I.5章21節)



「皆でつくるクリスマス」

表紙絵・中島 由起子

聖夜の星

黛 まどか

会釈して笑い返さるる小春かな

青空に雲打ちのべて秋水忌

鼻唄を母がつないで秋桜

逆上がりできて木の実をこぼしをり

フィニッシュの氷を掴みスケーター

地下鉄を出でて聖夜の星浴びる

煙突の丈不揃ひにクリスマス

※「秋水忌」父で俳人の

黛執の忌日です。

望みなき者を生かす神

元女子聖学院短期大学・聖学院大学教授 阿部 洋治

北海道の片田舎に生まれ育った私が初めて聖書を手にしたのは中学3年生の時でした。きっかけは、小学5年生の時、父が講読していた農業雑誌『家の光』の付録『子ども家の光』の欄に、「『子ども家の光』に音楽のページを作ってほしい」と投稿したことにありました。このことで本州の幾人かの人々から文通のお誘いの手紙が届きました。不思議なことに、高崎市の同学年の女性との文通が続くことになりました。この人は、中学3年生の頃、教会に行くようになりました。

私は、これをきっかけに、北海道ラジオ放送の日曜日朝のキリスト教番組「メノナイト・アワー」宛にハガキを書き新約聖書の贈呈を受けました。何となく気恥ずかしい思いでマタイ福音書を読みました。いくつかの主イエスの言葉に線を引きましたが、もち

ろん信仰には至りませんでした。他方、高崎の女性は高校1年生の時にクリスチャンになりました。

文通は、高校時代、途絶えました。高校の終わり頃、こちらからともなく再び手紙を交わすことになりました。私は、国公立の大学受験に失敗し浪人は許されず、不本意ながら、合格していた国家公務員（税務職）の道を歩むことになりました。最初の1年は札幌国税局の税務大学校で研修。翌年3月末、東京国税局の厚木税務署所得税課勤務を命じられて上京。宿舎は小田急線参宮橋駅近くにあった。1964年の東京オリンピック選手村宿舎でした。こうして小田急線の参宮橋と厚木の間を通勤することになりました。

そして、この年の5月5日、文通をしていた高崎の女性と小田急線参宮橋駅近くの喫茶店で初めて会うことになりました。不思議なことに、会話の中心は「伝道者になりたい」という彼女の志をめぐってのことでありました。クリスト教に馴染みのない私でしたが、二千年も昔のイエス・キリストという人の教えを宣べ伝えるために人生を献げたいと言う彼女の思いに興味を覚え、これを契機に近くの教会を訪ねることになったのです。

私がより一層深く信仰へと導かれることになったきっかけは二つあります。その一つは、この年の秋、ウィークデイのある休日、教会を訪ねてオルガン練習をさせてもらい、その終わりに心に思い浮かぶまま曲想を奏でていた時のことでした。私の心に、「神様はおられる!!」という思いが沸き起こったのです。それがどうしてであったかは分かりません。練習を終えてから、私はこの思いを牧師にお話ししました。牧師は私のために祈り、最後に、「日々の生活の中でお祈りするよう」と勧めてくれました。

しかし、宿舎は3人相部屋でしたから声を出して祈ることは

おんがくの集い

11月8日、地域でお世話になっている方々に感謝をお伝えする機会として、「おんがくの集い」を開催しました。昨年度に続き2回目の試みです。

演奏は、加須市観光大使の篠塚裕美子さんを擁し、これまでも度々お世話になっている「まりずむん」さん、大根地域で演奏活動をされている「大根根太鼓」さんをお願いしました。

それぞれ演奏に加え体験プログラムをご用意いただき、楽しい午後となりました。



とはできません。考えた末、私は、就寝前に、宿舎のすぐ側の明治神宮の電灯の灯つてゐる木陰で小さな声で初めて祈りました。「神様、私はまだあなたを信じることはできません。しかし、もしあなたが存在しておられるのなら、今日から祈ります。私を導いて下さい」と。

もう一つは、ある朝、この職員寮で聖書を読んでいた時のことです。私は、読んでいた聖書の言葉が自分に向けて語られていることに気づかされたのです。それまでは、聖書には何が書いてあるのかという思いで読んでいただけでした。ところが、この時、私は、聖書の言葉から、「あなたはどうかのか？」と問われていることに気づかされたのです。こうして、私は、聖書を神からの語りかけの言葉として読むことを教えられたのです。

こうした中で、私は、決断を促す一つの御言に直面させられたのです。それは、イエス・キリストが弟子たちに語られたマタイによる福音書8章34〜36節の言葉でした。

³⁴ わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい。³⁵ 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。³⁶ 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失つたら、何の得があろうか。

私は、「自分を捨てよ」、「自分の十字架を背負え」との言葉に心を揺さぶられました。「自分を捨てる」——それは、大学受験に失敗し傷ついた自分を受け入れることであり、望みを叶えることができなかつた自分の無力さ、絶望せざるを得ない自己自身を容認することにほかなりません。しかし、イエス・キリストは、自己への絶望という十字架を背負う者に、「わたしに従いなさい」とお招き下さったのです。イエス・キリストは、今も、絶望に突き当たる私たちを招いて下さり、私たちの思いと現実とを超えて生きる命を与えて下さるので

光の子どもの家のクリスマス

光の子どもの家 施設長 穴水 祐介

主イエス・キリストの御降誕を心よりお祝い申し上げます。

街中が華やかなイルミネーションに彩られるこの季節、光の子どもの家では、今年で40回目のクリスマスを迎えます。

今からおおよそ2000年前、ユダヤの人々は、ローマ帝国の厳しい支配のもとで、自由も希望も見出せない暗闇の中にいました。そんな中、彼らは700年も前から預言されていた救い主（メシア）の誕生を切に待ち望み続けていたのです。

強国の支配下で苦しめられていた暗い世の中に長い間待ち続けていた神様からのプレゼント「世の光」として御子イエス・キリストがお生まれになった出来事、それがクリスマスです。

「最も低いところから始まった愛」

救い主であるイエス様が生

まれた場所は、きらびやかな宮殿ではありませんでした。それは、暗く、汚く、臭い、家畜小屋。そしてゆりかごは、動物の餌箱である「かいばおけ」です。人生の始まりから、王の王であるお方が、最も低い者となられたのです。そのお方が、すべての人を愛で包み込み、すべての人の罪を赦すために、暗闇の中の希望の光としてこの世に降誕してくださったのです。

「子どもたちに伝えたい希望の光」

光の子どもの家には、それぞれに大変な経験乗り越えて、たどり着いた34名の子どもたちが生活しています。私たちは、このクリスマスという特別な時を通して、イエス様が一人ひとりの子どもたちを「希望の光」として照らし、かけがえのない存在として愛してくださっていることを伝えたいと願っています。

そして、私たちが出会えた

こと、共に生きていることを喜び、感謝し合える温かなクリスマスにしたいと願っています。特別な気持ちになるこの季節だからこそ、子どもたちと職員との絆をより一層深めてまいります。

開設から40年間、私たちはクリスマスの本当の意味をお客様と分かち合うため、12月25日の夜にページェント（聖誕劇）を上演してきました。

日本では「ただ楽しい日」となりがちなクリスマスですが、劇を通して、ご家族、お友だち、先生方、地域の方々、支援者の皆様に、救い主の誕生というクリスマスの真の意味を伝えてきました。ページェントは、在籍するすべての子どもたちが何らかの役で舞台に立ち、職員も一体となって創り上げる、大切な伝統です。

毎年12月になると配役が発表されます。夕食後から練習が始まります。はじめは、ふざけあったり、声が小さかったりとバラバラですが、回を重ねるごとに、子どもたちも感覚を取り戻していきます。そのうち施設のあちらこちら

からページェントの賛美歌が聞こえてきます。こうして、クリスマスを待つ豊かな雰囲気が出てきます。

〈アドベント〉

キリスト教では、クリスマスまでの約4週間をアドベント（待降節）と呼び、この期間を色々な工夫をしながら楽しんでいきます。そのひとつが、「影絵」です。

日が落ちてくると、光の子どもたちの正面入り口から見える三軒連なった家のそれぞれ窓には障子に映し出されたイエス様の降誕をイメージした影絵が映しだされます。暗い園庭から見える部屋の柔らかな灯りに浮かぶ白と黒の世界は見事です。

この影絵は、クリスマスの25日間週を重ねるごとに増えていきます。第4週目になると天使、羊飼、東方の三博士、マリア・ヨセフとみどりごイエス様の物語が完成します。

〈新しくなる〉

ここ数年、コロナ禍での中止、規模縮小、舞台から映像と毎年聖誕劇の形を試行錯誤してきましたが、今年は、早

い時期から影絵で聖誕劇を作ってみようと、光の子どもの家のものづくりの申し子である職員から申し出があり、これからの若い力に引き継ぐためにも影絵による聖誕劇を上演することにしました。また、音楽の賜物をもったクリスマスチャン職員も加わり新しいページェントを作り始めています。

また、全員参加のクリスマスをめざして、若い職員の方々にクリスマスカードや招待状、アドベントカレンダーなどの飾りを任せ楽しんで準備をしています。子どもたちをまきこんで素敵なクリスマスになることを祈っています。子どもたちにとって光の子どもたちの家で体験したクリスマスが、大人になっても忘れることのできない「宝物」のような思

い出にできるよう、共に力をあわせます。

い出にできるよう、共に力をあわせます。



断章から終章へ

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

今回ほど原稿を書くのに時間がかかっていることは記憶にない。今書き始めたこの文章が、確か4度目だと思う。認知能力の衰えに起因することとは否めないが、それよりも、書こうとする内容の揺れが止まらないことが大きな原因であるような気がしている。これからどう生きていくかが曖昧模糊としているから、何を他人に伝えたいかというポイントが見えてこない。

東京で大学浪人をしているときに、街中で手渡された聖書の言葉に感激した。英語の勉強のために英日対訳の聖書を読むというのが、大学合格を唯一の価値としていた当時の自分が聖書を読む言い訳だった記憶が残っているが、利他を主旨とし、脈々と謳いあげられた聖書の文脈は私を虜にした。日記に「貧しい人々、病める人々に捧げる心の成就に向かつていく道として、いま勉強しているのだ」と書いた。縁（これは仏教の言葉であるが）であろうか、受験場で、フランス語の大学教師を辞して医師の道を目指している、5歳年長の熱心なクリスチャンに出会い、彼から小さな聖書を頂いた。運よく2人とも北大医学部に合格した。本の名前もその内容も忘れてしまったが、大学の図書館に内村鑑三の著書を見つけて、大学の講義に出席せず

に、これを読んでいたりした。これからの記載は、大分前に「光の子」に書いたもので、繰り返しになり申し訳ないが、この稿のタイトルの「断章」の色合いの強い私の人生の1つの成り行きなので、申し述べてみたい。

北大に入学したのは1958年で、まさに60年安保闘争が学生運動でも盛り上がりつつあった時ではある。私は北大合唱団を覗いて合格気分を味わったりしたが、結局は、貧困者に対する社会活動を主旨とするセツルメント団体の1つに参加して、その中の活動が大学生生活の主要な部分を占めるようになっていった。当時、セツルメントの中にはクリスチャニティを旨とする団体もあったが、私が参加したセツルメントを指導していた学生は、いわゆる左翼系の人たちだった。自分ではクリスチャンだと思っていた私が、何故に左翼系のサークルに入ったのか、いまだによく理解できていない。内村鑑三の著書に親しんだ自分はどこへ行ったのか、そのプロセスは、まさに断点としか言い

ようがない。不器用な私が社会運動の1つとして、農村の子ども達に見せる人形劇に使用する馬の縫いぐるみを懸命になって作ったりしていた。ところが、1年もしないうちに、私はそのサークルを飛び出して、サークルの指導者とは思想を異にする、当時の全学連の運動に突入（この言葉が当時の私の活動を表現するのに最もふさわしいように思う）していった。

20歳そこそこの若年ゆえの事と言いつてもできるかもしれないが、そのころからの60年間の生き方は、断章の散らばりの繰り返しでしかなかったような気がしている。87歳の自分の年齢を考えると、このまま人生の終章を迎える可能性が高いが、それではあまりにも悔しいではないか。老健施設の職を辞さなければならぬ日もそう遠くはないと思うが、日々、自分がしてきたことを総括しながら、その連続性の上に立った人生の終章を迎えるべく生きていきたいと思っ

たのである。まさに断章の散らばりである。

シクラメンの花

彫刻家 中島 睦雄

「わが胸の燃ゆる思いを映す如く、乱れて咲けるシクラメンの花」

大分古い絵だが、久しぶりに引き出して見た。キャンバスの裏を見てみたら、この歌が書いてあった。

これがちゃんと短歌になっているかどうかは分からないが。

そのシクラメンの絵を見て別の思い出にふけた。

高校時代、同級生で景山君という友人がいた。彼はその後、長野県でキリスト教の布教活動に熱心だったようである。

その彼が、久しぶりにこちらに帰るということだったので、当時の私は筆を取り、シクラメンの花の絵を描いて彼にプレゼントした。

その後、彼は長野県へ帰ったのだが、間もなく彼からの手紙がきたのだ。

手紙にはこう書いてあった。

「年の瀬に 買い忘れたるシクラメン 君の筆に あざやかに咲く」

私はとても感動した。絵そのものは大したことはないのだが、彼のよこした歌があまりにも素晴らしすぎて、すっかり気に入っている。今でも忘れない。

心理室から
「vs 鮒、vs 世界」

中西 健吾

夏の酷暑も終わりに近づいた夕方、子どもを2人連れて、近所の小川に小鮒釣りに出かけました。鮒は子どもたちが自ら土を掘り起こして見つけた数匹のミミズ。鮒を針先に付けて水面に糸を垂らすと、すぐさま魚からの反応があります。2人とも見えない水中で何が起きているかを想像し面白がっていました。しかし、相手も生き物。そううまくは行きません。1人は3匹も釣り上げているのに、も

う一方の子は全く釣れないのです。浮きは動いているのに、ボクだけ針に魚が掛からない。何度も何度も仕掛けを水に放っていました。日が傾き、帰園の時間が来ても釣りを止めようとはせず、みんなで励まし「また行こうよ」と約束をしてやっと帰路に就きました。

先日、僕も個人的にプライベートで釣りに行きました。帰省のついでにふらっと、2、3時間でも遊べればいいなど、軽い気持ちで。小川の鮒釣りよりはしっかりした装備で、釣具屋で餌も購入しました。……釣れない。タナ（水中に垂らす糸の長さのことです）を変えても針を小さくしても釣れません。あと一投、あと一投、次こそは釣れると信じて投げ込み、気づいたら辺りはすっかり夜でした。釣果は6時間で少し型の良いハゼが1匹だけ。

僕もあの時の彼も世界の儘ならなさを知りました。そしてそのことに子どもも大人もムキになっていました。なかなか上手くいかない世界に抗

おうと、僕らはまさしくあの瞬間活き活きと生きていました。

また、彼を誘い釣りに行くうと思います。小さな鮒を釣り上げるため、儘ならない世界の中でも自分に為せることはあるのだと確かめるために。

サシバの里へ

9月23日、ご招待をいただき、栃木県芳賀郡市貝町にある「サシバの里自然学校」へ遊びに行きました。大きなハイジブランコや木製遊具、魚とりや流しそうめんと、厳しい残暑のなかでも楽しい一日を過ごしました。



はたいから

「成長と助け合い」

三井 正俊

クリスマスおめでとうございます！

今年度から地域小規模グループホーム”はたい”での働きとなりました。担当する男の子4人と一緒に引越してからあつという間に時間が過ぎてもうクリスマスです。新しい生活に慣れるまではしばらく大変でした。特に小学生の福と彬は転校もあったのでストレスも大きかったと思います。それでもここまで他の職員と協力し子どもたちと助け合いながらみんなで頑張ってきました。

ある日の夕食後の出来事です。職員は私だけでしたが体

調が優れなかったので「30分だけ横にならせて」と子どもたちに伝えてリビングのソファで横になりました。するとすぐに4歳の重明が枕と毛布を持ってきて「ちゃんとねな」と毛布をかけてくれます。中学2年の達也は食器を洗い始め食器拭きまでやってくれます。小学5年の彬は洗濯機を回し乾燥機までやってくれました。小学3年の福は「ミッチーはいま寝てるから静かにしようね」と言って重明の面倒を見てくれていました。そして最後は乾燥機が終わった洗濯物をみんなで畳んでくれたのです。

昨年度まで本園（佐藤家）

での働きだったので何かあった時はすぐに隣のユニットへ助けを求められたので安心感



がありました。が、はたいではそれが難しいためとても不安でした。しかし今回のことを通して子どもたちの主体性に感動すると同時に不安もだいぶなくなりました。私がしっかりとしなければと1人気を張っていたところがありました。『子どもたちと助け合いながらやっていけば大丈夫だ！』という思いにさせてくれたのです。

これからいろいろなことがあると思いますが子どもたちと助け合いながら共に成長し続けていきたいと思っています。

クリスマスの祝福が皆様の上に豊かにありますようにお祈り申し上げます。

「子どもサンタ」

岩崎 まり子

「羊子、昨日何か言ってた？」

「言ってた。何かごによごによ言って、途中で『こつちの方にする？』とか言ってた」「えー、全然覚えていない」

「ねえ、花梨は？花梨は何か

言ってた？」

「花梨ちゃんね、いつも通りブンブンってやってたよ」

「えー、やだあ」

就寝前のひととき、自分の寝ている間の様子を聞いて、照れたり嬉しそうだったりの2人の様子が、私をとっても幸せな気持ちにしてくれます。

何かしてあげているようで、実は、子どもたちから多くをもらっていることを思います。

「子どもたちは天使」とはとても言えませんが、ある意味、サンタクロースであるとは言えるかも知れません。子どもたちがプレゼントしてくれるものは、時にすぐに幸せと思えないものもありますが、必ず、私にとってプラスになるものです。そう信じられることも幸せなことだと思います。

皆さまどうぞ良いクリスマスを……



振込用紙を使ってお申し込みになる際は、下記の3つよりお選びください。
振込先は本誌10ページ下段にございます。

☐ 施設改築のために

☐ 子どもたちの自立・進学のために

子どもたちが、卒園後の生活に希望をもてるよう応援します。高校卒業後の専門学校、大学進学にあたり、できるだけ経済的負担を軽くできるように。日常生活の中でも、経済感覚を含め、卒園後の生活がイメージできるような取り組みをさらに進めていきます。

☐ 子どもたちの暮らしのため

用途を上記2点に限定しない場合には、こちらの項目をチェックしてください。

銀行等のATMからのお振込も可能です。用途をご指定になる場合は、別途ご連絡ください。

皆さまのご健康が守られクリスマスの祝福が豊かにありますようにお祈りします。

社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎
光の子どもの家を支える会 代 表 永野 三恵

寄付金受領感謝報告

2024年度に受領いたしました「光の子どもの家を支える会」への寄付金は

1,051万6,760円

でした。

今までは、ご寄付くださった方々、団体等のお名前を掲載させていただきましたが、
今後はこのような形で感謝のご報告を掲載させていただくこととなりました。

皆さまからの篤いご支援と励まし、そしてお祈りに、心より感謝申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎
光の子どもの家を支える会 代 表 永野 三恵

子どもたちのかがやきとともに

—光の子どもの家をお支えください—

世界中の人々が平和と平安の1年を望んでおりましたのに、2025年はむしろ歎きと苦しみと心配の多い1年となりました。ロシアのウクライナ侵攻を発端に戦闘状態は今なお続いています。さらにパレスチナ問題は多くの子ども達や市民が犠牲になり目を覆うばかりです。また自然災害、気候変動問題、食料問題、貧困など、地球のうめき声が聞こえています。子ども達が引き継ぐ世界は、いったいどうなってしまうだろう……と心痛むばかりです。1日も早く個人や自国の利害ではなく大きな地球規模の観点に立ち地球の仲間としてこの世界に平和が訪れますよう祈るばかりです。

その様な状況の中でも、私たちの毎日の暮らしは続いています。

ここ「光の子どもの家」では幸いなことに、今年度も子どもたちの笑顔やエネルギー、職員1人1人の細やかな配慮や忍耐強いチームワークに支えられました。

5月には子どもまつりも開かれ、お友達や卒園生が家族連れで集い笑顔がいっぱいの楽しい時を持つ事が出来ました。さらに秋には幼稚園、小・中学校では運動会が開かれ秋晴れの下に力いっぱい走り燃え、喜びに1日を過ごしました。

こうして、また1年が終わろうとしています。

皆さまと直接交流できる機会がありませんでしたので、この場をお借りしてご報告いたします。

現在、幼児5名、小学生14名、中学生10名、高校生5名の計34名が本体施設3軒、分園2軒の計5軒で暮らしております。来年3月には2名の若者たちがそれぞれの道に進みます。「光の子どもの家」で多くの愛情に包まれ生活してきた彼らも、社会の厳しさに触れ戸惑い悩むことが多くなります。そのアフターケアに心を配らなくてはなりません。

設立理念である「子どものための子どもの施設」を大切に、可能な限り「家庭的」であることを目指してこの地で40年の歩みを続けてまいりました。その歩みには一言では言い表すことの出来ない葛藤や悩みもありましたが、それにも勝る喜びや感謝がありました。その1年1年の積み重ねが、現在の暮らしを造っております。

地域のボランティアの方々、キリスト教主義の学校、多くの教会など個人・団体の直接的な支えのみならず、お祈りに支えられここまで歩んでくることが出来ました。

改めて皆さま方のお寄せ下さる援助に感謝申し上げます。どうぞ今後も変わらないお支えをお願い申し上げます。

私たちを取り巻く社会情勢の厳しさは増しております。その中であって「光の子どもの家」が、ますます神さまの愛の内におかれ守り導かれますよう祈り願います。

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。

光の子として歩みなさい。 (エフェソの信徒への手紙 5:8)

皆さまのご健康が守られクリスマスの祝福が豊かにありますように。

日誌抄

2025年9月

2025年11月

【12月1日の在籍児童数】

幼稚園5名 小学生14名
中学生10名 高校生5名
計 34名

【9月】

6日 第三者委員会との座談会
8日 平本議理事による施設内研修
19日 パントリー
23日 サシバの里↓6ページに記事

【10月】

4日 ご招待でサッカー浦和レッズ観戦へ
11日 第1回ポートレート撮影
19日 東大宮教会幼少科秋の子ども会、教会へ
20日 ポートレート撮影
27日 原道小運動会振休でみかも山公園へ
○ 学校でマイコプラズマ肺炎が流行し、光の子どもの家でも1名が入院。幸いなことに数日で退院でき、施設内で感染が広がることもなかった。

【11月】

6日 嘱託医の南條医師（鷺宮・高橋医院）に出張していただき、インフルエンザ予防接種
8日 おんがくの集い↓2ページに記事
17日 子どもたちの通う学校でインフルエンザが流行、学年閉鎖も。
22日 法人理事会・評議員会

【礼拝ご奉仕各位】

東大宮教会 東埼玉バプテスト教会 佐々木優牧師

【委員会等の動き】

クリスマス 今年度の計画を検討↓4ページ参照
里親支援専門相談員 他施設の里専と共に各地域のイベントで広報活動に参加
交換研修 藤村が「あいの実」へ、佐藤が「嵐山学園」へ、それぞれ3日間

【実習受入】

秋草学園短期大学2名、埼玉純真短期大学2名

【寄贈】（敬称略）

館乃雲、大塚勉、木田浩靖、黒川努、鈴木圭介、鈴木史乃、竹花信恵、竹林勝子、根本勝美、長谷川雅之、山田智・裕子、(有)カザマ、古河農友会、すすくく広場、Gモプレシヤス(株)、(株)ティ・エスロジステイクス、鳥海エステート、(株)なとり、ハートトリボン協会、(株)フレールベル館
他多数の皆様

【ボランティア】（敬称略）

〈華道〉岡本有代
〈手芸〉山田智・裕子
〈ウクレレ〉関口晃
〈工作〉常松洋介
〈保育〉坂本美紗子、聖学院大学ボランティア・アソシエーション
他多数の皆様

【休載のお知らせ】

近藤みちる「共育ちカンガルー日記」は休載です。

インスタ
日誌抄



@HIKARINOKODOMOIE

- ゆうちょ銀行 【郵便振替】00130-1-128022
【他銀行からの場合】ゆうちょ銀行
(金融機関コード: 9900) 019店 (当座) 0128022
○埼玉りそな銀行 鷺宮支店 (普通) 0124343
フク) ヒカリノコドモノイエ
○物品の寄贈は事前にお問い合わせください

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277-3
【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomoie.com/ 【印刷】(株)エル・アートデザイン